

# 2-2-1

シンポジウム：東アジアの現場

## 国定基準からみた 台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ

翁麗芳

Wong Leefong …… 国立台北教育大学教授



教育博士、国立台北教育大学幼児と家庭教育学学科教授。現在は台湾の教育部幼保一元化以降における保育者の免許制度研究の課題責任者を務める。台北市で就学前教育の教員養成に携わりながら、幼稚園評価、養成プログラム評価のため、毎月1回台湾全島および離島へ出向き、現場指導を行う。台湾の早期教育過熱現象を、親・教育者・行政の3つの角度から観察、グローバル時代における子どもの教育とケア政策のあり方を研究テーマとしている。共著に、『子育て支援の潮流と課題』（ぎょうせい）など多数。

### ● 幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」になった

台湾の近代的な幼児教育は、日本統治下の1897年に幼稚園がつくられたことに始まる。ここから1945年までは、遊びを通して子どもを育てるという日本的な幼児教育が行われていた。1945年以降は、保育者が子どもを教え導くという中国的な幼児教育が国民政府によって行われている。ただ、遊びを尊ぶ気質も残っているため、日本の特徴と中国的特徴の両方を備えていると言うことができよう。

台湾では2012年1月に幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」となった。これに伴い、幼稚園を管轄する機関である教育部では、近年の幼児教育、特に私立幼稚園での

教育が保育者による教科学習指導に偏っていたことを反省し、遊びを充実させながら、子どもの主体性を尊重した学びを進めようとしている。「遊びの中で学ぶカリキュラム」「生活に即したカリキュラム」「課題設定型カリキュラム」などが策定されたことは、その表れであるといえるだろう。

幼保一元化を実現するにあたり、教育部は、保育者の指導、教具や玩具、図書の質と量などについて40以上の国定基準を設け、1～5年に1回、これに照らしてすべての幼稚園を評価するようになった。——表①参照

「基礎評価」「專業認定評価」「追跡評価」の3つがあり、後二者は「基礎評価」を通過して初めて受けられる。——表②参照

「基礎評価」を通過しなかった幼稚園については、一定の改善期間を置いてから再評

表① 幼児園に関する法令の例

法令名	概要
幼児園教保活動課程暫行大綱	幼児園教育の基本原則を定めている。日本の幼稚園教育要領や保育所保育指針に相当する。発達心理学の研究者らが中心となって作成
幼児園教保服務実施準則	幼児園の始業・終業時刻、休暇期間などを定める
幼児園評鑑辦法	全ての幼児園が国定基準による評価を受ける必要があることを定める
教育部幼児園課程与教学品質評估表	幼児園のカリキュラムや教育の質についての評価指標。台北市立大学の幼児教育の研究者が作成

表② 幼児園に対する評価

評価名	概要
基礎評価	設立経営、財務管理、教育とケア活動、人事管理、飲食と衛生管理、安全管理などを評価
專業認定評価	園務リード、資源管理、教育とケア、活動過程、評価及び指導、安全と健康、家庭と地域などの類別のうち、幼児園の教育とケアという専門性の質に当てはまる項目について評価
追跡評価	基礎評価の未通過項目に対する追跡評価

評価を行い、それでも改善されていなければ、処罰の対象となる。

私は、学びにおいて遊びは重要な意味を持つと考えている。そのため、教育部が遊びを重視する方針を打ち出したことを、台湾の幼児教育が一步前進したと評価する。ただ、多くの保護者は、教科学習に力を入れてほしいという気持ちを依然として強く抱いているようである。また、教育部の方針では遊びに保育者が介入する割合が高く、私は子どもの自主性をもっと尊重してもよいのではないかと感じるが、評価制度がある以上、それを実行するのは難しいに違いない。

このように台湾の幼児教育には課題もあると、私は考えている。以下、幼児園でどのような学びと遊びが行われているか、具体例を挙げながら見ていこう。

## ● 多くの保護者は 教科学習指導を望んでいる

保護者は、幼児園に対して何を期待して

いるか。まず、これを検討してみたい。

台湾の有力紙『聯合晩報』の幼児園の授業に関する記事(2012年9月10日付)を紹介しよう。台北市のある公立幼児園では、2012年度、4歳児と5歳児の合同授業のカリキュラムを2011年度のカリキュラムと同じにすることにした。「幼児園とは知識ではなく技能を学ぶ場所であり、小学校などと違って授業に一定の進度を設ける必要はない」「カリキュラムが同じであっても、例えば切り絵であれば、4歳児は手で紙をちぎり、5歳児は鋏で紙を切るというように、活動の内容を変えればよい」という教育部の方針に沿ったためである。ところが、同幼児園の5歳児の保護者からは、「5歳児が4歳児の時と同じ授業を2年間続けて受けることになる」「5歳児には新しいことを学ばせてほしい」といった不満が聞かれるという。

一方、公立幼児園に比べれば教育部の指導から自由になれる私立幼児園では、4歳児は4歳児のカリキュラム、5歳児は5歳児のカリキュラムというように、年次ごとに学習内容を分け、授業にも一定の進度を

設けている。教育部はこれを幼児教育として正常ではないと見て、今後改めるように指導していくとしているが、保護者には私立幼稚園の教育の方が好ましいと考える人の方が多いと、私は感じている。複数の年次で同じカリキュラムに取り組むことがある公立幼稚園の教育を「冷めたチャーハンの温め直し」と揶揄した言葉が、保護者の間で流行しているからである。

これらの例からは、教科学習を重視してほしいという保護者の心情が強いことが見て取れるだろう。

## ● 幼稚園でも教科学習指導は依然として続いている

幼児教育の方針を遊び重視にするという教育部の方針転換は、教科学習指導を否定することを意味しない。そればかりか、教育部は、教科学習指導についてはこれまで通り高い水準を維持していくとしている。そして、実際、どの幼稚園にも保育者による教科学習指導は多く見られるし、保育者がどのような教育に力を入れて指導すべきかも法令で定められている。

例えば、「語文」、言語教育である。都市部の幼稚園では台湾の公用語である北京語の学習指導、山間部の幼稚園では、北京語だけでなく、ミンナン閩南語や客家語など、その地方の民族の母語の学習指導にも熱心に取り組んでいる。保育者と保護者が子どもに絵本を読み聞かせるイベントや、保育者による子どもの毎日の活動記録なども、都市部、山間部を問わず大半の幼稚園で行われている。こうした教科学習指導に対しては、保護者の満足度は高いと考えられる。

また、私は授業を見学していて、保育者の学習指導力は私立幼稚園よりも公立幼稚園の方が高いと感じる。公立幼稚園の保育

者は全員が政府機関採用試験の合格者、つまり国家資格保有者であるが、私立幼稚園の保育者には国家資格を持たない人もいることが、学習指導力に表れているのかもしれない。

教育部は、保育者が大学などに通学し、国家資格を取得できるように、私立幼稚園に補助金を支給するようになった。私立幼稚園の教育全体の質を高めようとしているのであろうが、保育者の学習指導力を高めようというねらいも大きいのではないだろうか。

## ● 台湾と日本との幼児教育観の違い

子どもは自主的な遊びを通して多くのことを学び、心身ともに成長していく。これは、今や多くの国で幼児教育に携わる者の共通認識である。台湾の保育者も、なるべく子どもの自主性を尊重したいと考えている人が大半であることを、私は研究を通して知っている。

ただ、先にも述べたように、国民政府は、従来、保育者が子どもを教え導く幼児教育を進めてきた。そのため、保育者の重要な役割は「教学」、つまり授業であり、これを上手に行うことができこそ立派な保育者であるという幼児教育観は、保育者の間にも根強く存在する。

例えば、台湾の幼児教育が重視することの1つ、道徳・品格教育を見てみよう。子どもが道徳や品格の大切さを学べるような寓話などを載せた学習用の絵本がたくさん出版されており、これを保育者が子どもに読み聞かせる幼稚園が多い。読み聞かせた後、保育者は、絵本の内容について道徳的に良いこととは何か、悪いこととは何かを子どもに尋ねる。そして、子どもが正しく

答えられれば、それで道徳・品格教育をしっかり行ったと考えることが多いと、私は感じている。

伝統的に子どもの自主性を尊ぶ日本では、保育者は、遊びや子ども同士のトラブルなどを通して、すべきことやすべきでないことに子どもが自分で気づけるように促すのではないだろうか。

また、どの幼稚園でも保育者と子どもとの集団



図① 討論がさかに行われている。—— 図①参照  
遊びの中で何に気づいたか、明日はどのような遊びをするかなどについて、子どもが自分の考えを述べてから、必ず保育者がまとめる。子どもは自由に意見を交換しているが、保育者が強くかかわっていることがわかるだろう。

日本の幼児教育では、台湾のような集団討論はあまり行われていないと思う。台湾の保育者の多くは、日本の幼稚園や保育所を見学すると、集団討論をしないことに驚く。そして、「日本の先生方は何もしていないではないか」と口を揃える。台湾と日本との、子どもに対する保育者のかかわり方の違いを象徴しているといえるだろう。

## ● 幼稚園での遊びは Guided play と呼べるか

ある公立幼稚園の保育者は、学びにおける自主的な遊びの重要性を十分に認識しながらも、それはあくまでも理想であるとして、次のように述べる。「何を使ってどのように遊ぶかなど、遊びの内容も仕方もすべて子ども自身が決めた方が、遊びを通して

得られる気づきは大きくなるでしょう。自由遊びこそ、理想的な遊び方であると、私は考えます。ただ、子どもの力を伸ばすためには、保育者による系統的な指導が必要なのではないでしょうか」と。つまり、保育者は意図的に遊びをガイドしているということである。これは、公立、私立を問わず、あらゆる幼稚園の保育者に共通する見解であると、私は考えている。

このような幼稚園での遊びは、Guided playなのかどうか。その判断は難しいが、私としてはGuided playと呼ぶことに違和感を覚える。子どもに対する保育者のかかわり方が強すぎると思うからである。ただ、Direct instructionと呼ぶにはかかわりが弱いだらう。台湾の幼児教育における遊びの特徴をしっかり把握できるように、今後さらに研究を続けたいと考えている。



# 2-2-2

シンポジウム：東アジアの現場

## 「遊び」を通して「学ぶ」： ～教育神経科学の視点から～

周 念麗

Zhou Nianli …… 中国華東師範大学教授



華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任、教授。1995年にお茶の水女子大学心理学士号、1998年に東京大学大学院教育学修士号、2003年に中国華東師範大学心理学博士学位を取得。2004年6月～12月、米国Arizona State University客員研究員として乳幼児の情緒発達、2006年5月～2007年3月、国際交流基金フェローとして名古屋大学で統合保育について研究。研究領域は児童心理、親子関係、0～3歳児の多元知能の測定と育成方案。主な著作は、『就学前児童の発達心理学』『就学前児童の心理健康と指導』『自閉症児の社会認知—理論と実験研究』『就学前特殊児童の統合保育における比較と実証研究』『0～3歳児の多元知能の評価と育成』など。

### ● 都市部に見られる 幼児教育の変化

近年、中国では幼児教育の仕方に変化が見られる。1949年の建国以来、旧ソ連の教育思想の影響のもと、保育者による教え込み型の幼児教育を行ってきたが、1990年代末頃から子どもの自発的な学びを重視する教育理念が幼児教育研究者によって紹介されるようになった。これを支持する保育者には、従来の教科学習指導から、子どもが遊べる環境をつくり、子どもを見守り、支援することへというように、保育者の役割をも変えていこうとする動きが見られる。

保育者の役割の変化は、上海などの都市部の保育所・幼稚園に既に現れている。保育者は教科指導を行う割合が低くなり、子

どもの自主性を尊重しながら、遊びのガイド、Guided playを行う割合が高くなっているのである。

### ● どのようなGuided playが 中国で行われているか

中国のGuided playでは、保育者の立てた教育目標に沿って、教室や屋外の敷地にそれぞれ遊びのコーナーを設け、そこにさまざまな関連遊具を置くことが多い。好きな遊具を用いれば、子どもはもっと楽しく遊べるように自分で工夫するため、保育者に与えられた遊具をただ使う場合に比べて、子どもの気付きや学びが何倍にもなると考えられる。

Social pretend play（社会的なごっこ遊び）は、中国のGuided playの特徴の一つで

ある。これは、病院や銀行、スーパーマーケットなど、社会生活でよく利用する場所を保育者が段ボールなどで幼稚園の教室に再現し、そこで子どもが行うごっこ遊びで、都市部のほとんどの保育所・幼稚園が幼児教育に取り入れている。—— 図①参照

社会的なごっこ遊びの舞台として教室に再現されている場所について検討しよう。先に挙げた例のうち、病院で見られるのは金銭の間接的な授受関係だけである。しかし、それ以外は全て商取引を行う場所、つまり金銭の直接的な授受関係が見られる場所である。こうした場所が遊びの一環として多くの保育所・幼稚園で再現されているのは、政府の経済政策を反映しているのではあるまいか。すなわち、社会的なごっこ遊びが行われていることは、1970年代末から改革開放政策を展開し、全国的に経済を非常に重視してきたことと密接な関係があると、私は考えているのである。

## ● 子どもは社会的な ごっこ遊びを通して多様な 人間関係を仮想体験する

保育者による指導が中心となる従来型の幼児教育と比べて、子どもの自主性が尊ばれる社会的なごっこ遊びには、どのような利点があるのだろうか。以下で教育神経科学の知見に基づいて解析したい。

まず、子どもの大脳敏感期における利点を見ていこう。敏感期とは、大脳組織や機能が特定の外部刺激に対して非常に敏感に反応する時期を指す。この時期に経験したことは、大脳の神経回路の仕組みと機能を強固に、また精密にする。そのため、大脳敏感期の子どもが社会的なごっこ遊びを行えば、ごっこ遊びで設定される場面を持つ社会的意味、つまり、人間関係や商取引、



図①

金銭の授受関係などを理解しやすくなる。これは、将来社会に適応するための基礎にもなるだろう。

次に、子どものミラーニューロンの発達を促すという利点がある。ミラーニューロンは大脳の神経細胞の1つで、他者の行動を参考にし模倣するという人間の動作を司っていると考えられる。1992年、イタリアの脳科学者Giacomo Rizzolattiの研究グループは、サルの下前頭回(F5領域)についての研究を通して、サルが目的を持ってある動作を行ったり、動作に関連する音が聞こえたりした時に下前頭回(F5領域)の一部の神経細胞に放電現象が起きることを発見した。さらに研究したところ、この放電現象が起きる細胞には、観察者の大脳内に他者の動作を鏡のように映し出す機能があることがわかり、ミラーニューロンと命名された。社会的なごっこ遊びでは、子どもは大人の動作を模倣することに努めるから、ミラーニューロンはそれだけ刺激を受けることになり、発達も促されると考えられる。

続いて、子どもの大脳の、言語に対する感覚と数に対する感覚の発達を促すという利点について、2つの側面から考えてみたい。

人間にはブローカ野と呼ばれる脳領域があり、動作の模倣と言語コードの両方にかかわっている。このことは、動作模倣と言語理解の間に密接な関係が存在することを

示している。まず動作を模倣し、音声、語調を含む言語模倣へと進むというように、子どもの発達過程を推論することもできる。これが、1つ目の側面である。

また、子どもは生来、system of number sense（数感覚系統）を有しており、これが数字と数字に関連する知識の基礎をなすと考えられる。アメリカの脳科学者Christine TempleとM. I. Posnerの研究によって、低年齢の子どもが大人と同じように頭頂葉を用いて数字の比較問題を解こうとしていることが明らかになった。Christine Templeによる、脳波を用いた別の研究では、5歳児が、4は5より大きい小さいかといった数の対比についての問題に取り組む時、頭頂葉の皮質が大人と同じように活性化していることが解明されている。これが、2つ目の側面である。

以上から、子どもは社会的なごっこ遊びを通して、言語交流と貨幣交換についての認知を高め、さらに大脳の言語と数に対する感覚の領域の機能も発達させていると考えられる。

最後に、幼児の「社会脳」を発達させるという利点について考察したい。「社会脳」とは、社会とのかかわりの中で、他者の目的や意図、信念、推測などを理解したり、観察したりする情報処理の機能を司る、社会認知の神経ネットワークであり、主に前頭葉眼窩部、側頭回、および扁桃体が含まれる。「社会脳」には、社会情報処理システム（ventral social-affective processing system, VSAPS）という領域があり、「社会脳」も人類社会のネットワークのように、大脳の中の各領域に分布して人間関係が互いに影響しあうネットワーク処理作用を受け持っている。社会的なごっこ遊びを通して、子どもは、銀行という場が設定されれば銀行員と顧客、病院という場が設定され

れば医師や看護師と患者というように、それぞれの場での人間関係を仮想体験することになる。他者の心の中の期待や感情を読み取る体験が求められるため、社会的なごっこ遊びは「社会脳」の発達を促すと考えられるのである。

## ● Guided playを中国全域に普及させていきたい

中国の幼児教育が保育者による指導からGuided playに変わることを、私は歓迎する。ただ、今のところ、変化が見られるのは都市部の保育所・幼稚園に過ぎず、農村部では大半の幼稚園では机に向かって算数や文字を学ぶといった指導型教育が行われている。—— 図②参照 この二極化を解消し、中国全体にGuided play、特に社会的なごっこ遊びを広げていきたい。

また、山間部への遠足や樹木の栽培など、自然を活用したGuided playも普及させるべきであると、私は考える。子どもが生命の尊さに気づいたり、自然科学に興味を持つようになったりするきっかけになるからである。しかし、自然環境に恵まれた農村部でさえ、こうしたGuided playを行う保育所・幼稚園は少ない。あらゆる子どもが秘めている、無限の力を引き出すために、今後、充実させていきたい。



図②

# 2-2-3

シンポジウム：東アジアの現場

## 「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」 という保育を目指して

－若手保育者の「保育観と保育実践の差異」に関する調査から－

入江礼子

Irie Reiko …………… 共立女子大学教授



共立女子大学教授、OMEP（世界幼児教育・保育機構）日本国内委員会常任理事。専門は幼児教育・保育学。お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了（家政学修士）。幼稚園教諭、母子愛育会家庭指導グループ（現愛育養護学校幼稚部）保育者を経て家庭に入る。3人の子育て後、保育士養成・幼稚園教諭養成大学等で教鞭をとる。現在、共立女子大学家政学部児童学科教授。主要著書に『育児日記からの子ども学』（共著、勁草書房）、『親たちは語る』（共編、ミネルヴァ書房）、『乳児保育』（編著、相川書房）など。

### ●はじめに

保育とは、「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」という時を紡ぎだすことであると言っても過言ではないだろう。保育者は、このように子どもたちが希望をもって、明日へと向かう姿を胸に刻みつつ、子どもたちとの生活を共にしながら「今」を充実させることに心を傾ける。

しかし、保育者であれば誰もがそのような時を紡ぎだすことが可能なのであろうか？ 保育の現実に目を向けると、保育の理想と保育実践には多くの乖離が存在する。果たしてその乖離を乗り越える道は残されているのだろうか？ ここでは我が国の保育の担い手である若手保育者に関する「保育

観と保育実践の差異」という調査から、若手保育者が保育と格闘する姿を浮かび上がらせていこうと思う。

### ●調査について

本調査は我が国を含むOMEP（世界幼児教育・保育機構）のアジア・太平洋地域5か国（日本、中国、韓国、ニュージーランド、シンガポール）の共同研究“Survey of the Gaps among Teachers’ Beliefs, Pedagogical Knowledge and Actual Teaching Practice”（邦題：保育者の保育観と保育実践における差異について－経験年数2～5年の保育者を中心として－）の一環として実施された。日本における共同研究者は著者を含む7名



(上垣内伸子、小原敏郎、酒井幸子、白川佳子、内藤知美、吉村香、入江礼子)である。この調査に関する報告は2013年7月、中国・上海でのOMEP世界大会におけるシンポジウムで行った。経験年数が2～5年の若手保育者を選んだのは、我が国同様に共同研究に参加した国々の保育においても、若手保育者が保育の大きな担い手になっているという現状があったからである。

## ● 対象者および期間

対象者は都内および近郊の保育者(幼稚園教諭、保育士)。保育者の経験年数は2～5年とした。調査期間は2012年6～7月、著者らが幼稚園・保育所に調査協力を依頼し、質問紙を送付した。その結果、144名から回答を得た。

## ● 調査項目

調査では保育者が大切と思っていること(保育観)と現実のずれを測定する項目を作成した。質問項目は以下のとおりである。

質問1:「日々の保育の中であなたが特に大切だと思っていることはなんですか?」(自由記述で回答)

質問2-1:「質問1でお答えいただいた大切だと思っていることは、現在のあなたの保育においてどの程度行えていますか?」(4件法で回答)

質問2-2:「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由について」(自由記述で回答)

質問3:「今より何が変わればより良い保育

が行えますか?」(自由記述で回答)

## ● 分析方法

質問1、質問2-2、質問3の自由記述はKJ法\*によって分類した。

\* KJ法: データをカードに記述し、カードをグループにまとめて、図解し、論文等にまとめていく方法。

## ● 結果と考察

### (1) 質問1

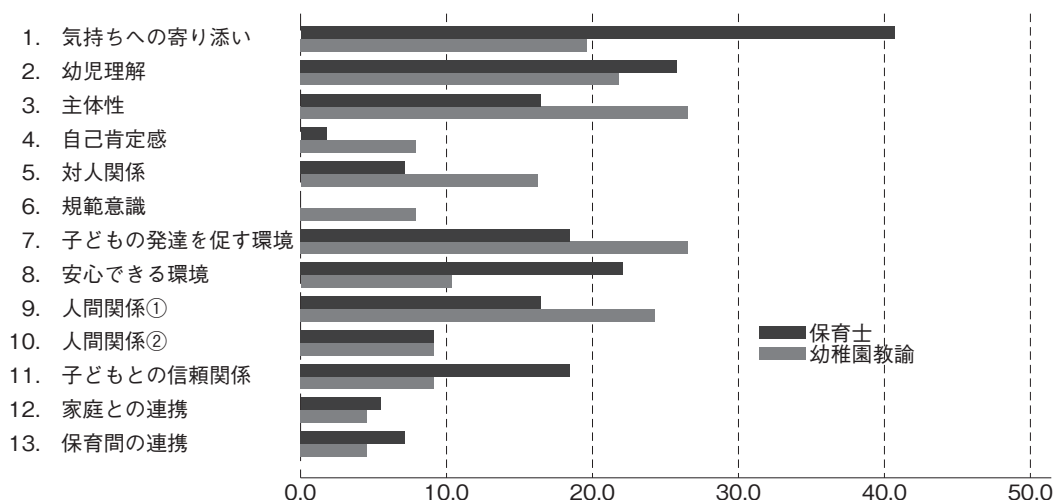
「日々の保育の中で保育者が大切に思っていること」について

自由記述の内容をKJ法によって分類した結果、「子どもへの理解(図①の1. 2.)」「発達の諸側面(図①の3. 4. 5. 6.)」「保育環境(図①の7. 8. 9. 10.)」「信頼関係・連携(図①の11. 12. 13.)」という4つの大カテゴリーと13の小カテゴリーが抽出された。このうち多かった「子どもへの理解」「発達の諸側面」「保育環境」という3つの大カテゴリーは、我が国における現行の幼児教育・保育の枠組みである幼稚園教育要領・保育所保育指針において重要とされていることとも合致していた。

次に、「保育の中で保育者が大切に思っていること」についての幼稚園と保育所の比較を行ったところ、以下のグラフに示される結果を得た。— 図①参照

幼稚園教諭の回答数が保育士より多かったものは「3. 主体性(記述例: 子どもが目的を持ち、主体的に活動すること)」「4. 自己肯定感(記述例: 子どもが自信を持ち、自己肯定感をもてるようにする)」「5. 対人関係(記述例: 子どもが人とのかかわりを通してさまざまなことを経験すること)」

図① 日々の保育の中で保育者が大切に思っていること



「6. 規範意識（記述例：挨拶など基本的な作法を身につけること）」「7. 子どもの発達を促す環境（記述例：幼児の生活に無理のないよう、また経験が偏らないよう、長期的な見通しをもった上で日々の保育を計画し、実践していくこと）」「9. 人間関係①（保育者自身の表情や行動見本）（記述例：あなたのことが大好きだよ、あなたのことを見ているんだよ、と伝わるような優しい表情や言葉かけを意識している）」であった。このなかで「3. 主体性」、「4. 自己肯定感」、「5. 対人関係」、「6. 規範意識」は大カテゴリー「発達の諸側面」に含まれている。このことから、幼稚園教諭は保育士に比して「発達の諸側面」をより大切にしているのではないかと考えられる。

一方、保育士の回答が幼稚園教諭より多かったものとしては「1. 気持ちへの寄り添い（記述例：子どもの気持ちに寄り添い、共感し、励まし、慰め、心の拠り所となるようにかかわること）」「8. 安心できる環境（記述例：保護者と離れて過ごす子どもたちにとって、それぞれの気持ちを受け止めて安心して過ごせるように、人的・物的環境を整えている）」、「11. 子どもとの信頼関係（記述例：子どもの一人ひとりとじっくり応

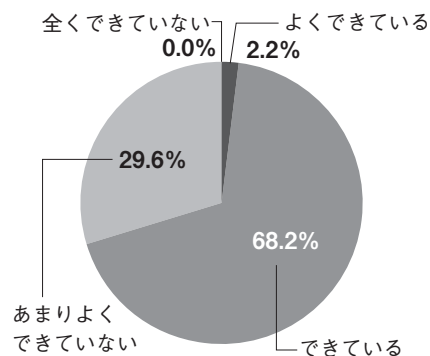
答的にかかわり、スキンシップを図ること）」であった。これらの結果は、保育所保育指針にもあるように保育所保育においては「養護と教育の一体化」が必要であるとされていること、さらに「養護」の部分は「教育」の土台になるため、保育所においてはより重要とされていることを示していると考えられる。

(2) 質問2-1

「保育の中で大切に思っていることを行えている程度」について

— 図②参照

「日々の保育の中で大切だと思っていることを行えている程度」については、「よくで



図②

きている」(2.2%)、「できている」(68.2%)という肯定的回答が合わせて約7割と比較的高く、「あまりよくできていない」(29.6%)という否定的回答の約3割を大きく上回った。

### (3) 質問2-2

#### 「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由」について

肯定的内容の回答をKJ法でカテゴリー化した。具体的に見ていくと「保育への前向きな意識や取り組み（記述例：自己の保育への思いを意識した実践を心がけている）」、「一人ひとりの理解やかかわり方の工夫（記述例：子どもの発達、個性に応じたかかわりを心がけている）」といった保育者個人の意識という視点をもつものと、「職員の協力体制、園環境の充実（記述例：学年会で実態を話し合い、細かい週案を立てる中で経験内容や援助の仕方を考えている）」などの「組織のあり方」という視点をもつ者がいることがわかった。また、行えていないと回答した保育者では、「自己の葛藤や力量不足の認識（記述例：発達が遅れていると思われる子がいて、その子に対しての援助がま

だできていないところがあるため）」、「自分自身の時間や余裕のなさ（記述例：自分の思いと行為とのギャップに不安・葛藤を感じる）」、「職員間や園としての課題」を多く挙げていた。

さらに、幼稚園教諭と保育士で見ると、求める保育の実践が行えている要因としては、幼稚園教諭は、保育者自身の前向きな意識や取り組みを挙げ、保育士は、職員の協力体制、園環境の充実など、職場・園環境の要因を挙げているところに特徴を見いだせた。

### (4) 質問3

#### 「何が変わればより良い保育が行えますか？」について

— 表①参照

ここでもKJ法によって自由記述の内容を整理した。その結果2つの大カテゴリー、11の中カテゴリー、27の小カテゴリーを得た。大カテゴリーでは「自己に注目」と「自己以外に注目」に分類されたが、これは、より良い保育を行うためには保育者自身が積極的に変わろうとしている場合と、社会や職場など自分以外の要因に注目して、そ

表①

大カテゴリー	中カテゴリー	出現度数 N=129	(%)
自己に注目	1.ゆとり	23	(17.8%)
	2.連携力(人間関係力)の向上	22	(17.1%)
	3.保育意識の変革	25	(19.4%)
	4.保育力の向上	57	(44.2%)
	5.自己管理	4	(3.1%)
	6.経験を積む	3	(2.3%)
自己以外に注目	7.社会環境の改善	12	(9.3%)
	8.職場環境の改善	24	(18.6%)
	9.子ども環境の改善	5	(3.9%)
	10.保育内容の改善	4	(3.1%)
	11.コミュニケーションの改善	27	(20.9%)

れが変わることが必要だと考えている場合があるということである。中カテゴリでは「経験年数を積み、教材研究を続け、子どもが必要としている経験について援助できるように手だてを増やしていく」といった内容を持つ「4. 保育力の向上」が全体の半数弱と最も多いことがわかった。保育経験2～5年の保育者にとっては「保育力の向上」が喫緊の課題となっていることがうかがえる。

また、幼稚園教諭と保育士の回答を比較したところ、幼稚園教諭では「保育力の向上」「保育意識の変革」「連携力（人間関係力）の向上」「ゆとり」という回答が多かった。一方、保育士では「コミュニケーションの改善」の回答が最も多く、「職場環境の改善」「保育力の向上」と続いた。両者には「保育力の向上」という共通点はあるものの、幼稚園教諭では自分が変わればより良い保育ができると考えているのに対し、保育士は自分というより職場環境などの「自分以外のもの」が変わらなければより良い保育の実現は難しいと考えていることがうかがえた。

## ●まとめ

今回の調査で、経験年数2～5年の保育者が自分が大切に思っている保育が行えていないとする割合は3割と比較的少なかった。しかしながら、この層が日本の保育の主要な担い手であることを考えると、これら保育者が抱える課題に対して十分な対応が必要であると考えられる。

これら若手の保育者が、求める保育を実践するためには第一に「保育力の向上」が鍵となる。その他、「コミュニケーションの改善」「保育意識の変革」「職場環境の改善」「ゆとり」「連携力（人間関係力）の改善」と続く。連携については、保育の内部要因である「保

育者」「保護者」「経営者」との連携が必要であるとの記述はあるが、保育を取り巻く外部要因である「保育政策」「社会の保育観」などの改善意識は必ずしも高くない。これは2～5年といった経験年数による結果であるのか、あるいは日本の保育者においては、保育を取り巻く外部要因に対して改善を求める姿勢が弱いのか、今後の、経験年数の比較や国際比較が求められる。

また、幼稚園と保育所という施設種別の比較からは、改善の方法について、幼稚園教諭は、自己に注目し改善に取り組もうとする傾向が高く、一方、保育士は、職場環境などの自分以外の「組織」「園のシステム」の変革を求める傾向が高いことが指摘できた。



# 2-2-4 パネルディスカッション

シンポジウム：東アジアの現場

## panel discussion

司会●塘 利枝子 Tomo Rieko …………… 同志社女子大学教授

パネリスト●

周 念麗 Zhou Nianli …………… 華東師範大学教授

翁 麗芳 Wong Leefong …………… 国立台北教育大学教授

入江礼子 Irie Reiko …………… 共立女子大学教授

朱 家雄 Zhu Jiexiong …………… 華東師範大学名誉教授

### 東アジアの現場から

周念麗先生、翁麗芳先生、入江礼子先生の講演の後、上記3名に朱家雄先生を加えたパネルディスカッションが、塘利枝子先生の司会で行われた。

#### 台湾の幼児教育の現状について

塘● 最初に、3人の先生方のご講演内容について、会場の皆様から質問をいただければと思います。

**Q1** 翁先生はご講演で、現在の台湾の幼児教育について、保護者は歓迎しているが、自分は違和感を覚えるとおっしゃっていました。違和感があるのはどのようなことについてでしょうか。

翁● 保育者の指導が強く、子どもの自主性が十分に尊重されているとは言えないことです。

また、保育者の教育目標の立て方も不十分だと思います。例えば、教育部（幼稚園を管轄する機関）の指導により、多くの幼稚園では野菜だけを用いた料理を給食として出す「草食の日」を週1日設けていますが、なぜこの取り組みを行うのか、これによって子どものどのような力を伸ばしたいのかは、あまり検討されていないように感じます。

朱● 私も、翁先生に質問があります。台湾が打ち出した、新しい幼児教育の指導方針には幼稚園の評価基準が細かく設けられており、これに照らして幼稚園が審査されます。以前、アメリカがこれと似た教育政策を行いました。うまくいきませんでした。台湾ではどうでしょうか。

翁● 評価基準を設けることは、幼児教育の質を向上させるきっかけにはなるでしょう。ただ、保育者が審査に合格することばかりを意識し、子どもに目が向かなくなる危険性も秘めているはずですよ。

## 中国のGuided playは遊び時間の格差を解消する鍵

Q2 周先生に質問が2つあります。1つ目は、中国で今、Guided playが必要なのか。2つ目は、中国がどのような子どもを育てようとしているかということですよ。

周● 1つ目の質問からお答えします。中国の山間部の子どもは、都市部の子どもに比べて、遊び時間が大幅に短いことがわかっています。地方は高齢化が著しく、両親が共働きである割合も高いため、子どもは保育所・幼稚園から帰宅すると、祖父母の世話をしなければならず、遊ぶ時間がないのです。保育所・幼稚園で過ごす時間はどの子どもにも共通してありますから、ここでGuided playを行えば、限られた時



間に子どもの力を最大限に伸ばせるだろうと期待しています。

次に2つ目の質問、中国が育てようとする子ども像についてですが、これは、今、変わろうとしています。以前は教科学習に長けた子ども、つまり英語や数学の試験で良い成績を収める子どもでした。ところが、グローバル化が進む近年は、多様な価値観を持つ人々と円滑に意思を疎通できるように、コミュニケーション能力や社交性などを身につけた子どもの育成にも、力を入れるようになりました。社会的なごっこ遊びがさかんに行われているのも、このような政府の教育政策の転換を反映していると考えられます。

塘● 周先生に中国でGuided playが求められる理由について考察していただきましたので、入江先生には、日本でGuided playが求められる理由についてお願いいたします。

入江● 私が幼稚園に通っていた1950年代には、友だちと一緒に、近所の小学生であるお兄さんやお姉さんに交じ



って原っぱなどでよく遊びました。その中で社交性を身につけられましたし、ずるいこと、いけないことなども学びました。子ども同士の遊びを通して、良い社会勉強ができたと思います。

ところが、近年は異なる年齢の子どもが集まり、子どもだけで遊ぶ機会が少なくなっていると思います。逆に言えば、あらゆる遊びに大人がかかわることが増えているはずです。すると、大人、保育者はどのように子どもにかかわるべきかが非常に重要な論点になるわけです。

## 中国・台湾の幼児教育は今後どのように展開するか

**塘●** 日本の保育者は、子どもがなるべく自由に遊ぶ、言い換えれば子どもの自主性を最大限に尊重したGuided playを行っています。一方、中国や台湾の保育者の行うGuided playは、日本に比べると子どもの自由度が低いようです。

Guided playとは、子どもが生まれながらにもっている好奇心や探究心を伸ばせるように保育者がガイドする遊びです。最も大切なのは子どもの自主性であり、保育者の役割はあくまでも子どもを補佐することにあります。そういう意味では、中国や台湾よりも日本のGuided playのほうが、Guided

playの理想に近いと私は思います。

中国や台湾は、今後、日本のようなGuided playを行うようになるかどうか、翁先生、周先生、予測をお願いいたします。

**翁●** 台湾の保育者が日本のGuided playを見れば、子どもが自由に遊んでいる姿に目を見張るでしょう。ただ、私の講演でもお話ししたように、保育者は子どもを教え導くべき存在であるという認識が、台湾には根強くあります。そのため、日本のGuided playの長所を認めながらも、自分たちも実践しようとはしないような気がします。台湾の保育者は、現状でも子どもの自主性を精いっぱい尊重していると考えているはずです。

**周●** 中国の幼児教育では、この10年ほどの間に、子どもの自主性が尊重されるようになってきていることは間違いありません。幼児教育研究者によって、子どもが遊びを通して多くを学ぶという認識が、少しずつですが確実に、幼児教育の現場や保護者に広がっているためだと考えられます。

panel discussion